映画「七つの海を越えて」とイン・パ分離独立の難民

片　岡　弘　次

Film "Crossing over Seven Seas" and Refugees through Partition of India

Hiroji KATAOKA

要　旨　イン・パ分離独立で生じたパーキスターンへの難民が，パーキスターンの中に定住する中で，どのような問題が生じたかを，移民を扱った映画「七つの海を越えて」さらに動乱文学にあたる小説『目の前は海（アーゲ・サマンダル・ハイ）』及びイギリス，カナダで難民二世のインタビューを通して考える。

第一章　「七つの海を越えて」と移民問題

何年か前にNHKで，パーキスターンとノルウェーの合作映画「七つの海を越えて」が放映された。それはある移民少年が移民先で成長していく映画で1991年に作成された。パーキスターンからノルウェーへ一家ごと移住した少年アスラムが主人公である。アスラムは転入した小学校で，偏見や周囲の無理解に悩みつつも同級生と友情を育てていく物語である。

1）映画「七つの海を越えて」

映画はつぎのように始まる。

ある日の真夜中のことで，主人公のアスラムは，なかなか寝つかれなかった。アスラムは変な予感がした。父親はいつもならとっくに帰ってきているのに，その日はいつになっても帰ってこなかった。

やがて父親が帰り，アスラムはパパが帰ってきてよかったと喜ぶ。ところが父親と母親が今まで聞いたことのないような大きな声でどなり合いの喧嘩をしているのが聞こえてくる。

父親は遠くにいかねばならないようだった。母親は子供たちは一体どうなるのかとどなっているのが聞こえてくる。パパがどこかへ行ってしまうなんてとアスラムは心配する。

場面は変わり朝となり，「アスラム，朝だよ」との母親の声で目を覚ます。あれは夢だったのかな，それともママがパパの気持を変えたのかとアスラムは昨晩の出来事を思いだす。そしてパ

パが気を変えてくれたんだ，パパが僕たちを残してどこかへ行くはずがないと考える。

いつものように父親のオートバイの後ろに乗り学校へ行く。

しかしアスラムは不安を捨て去ることはできなかった。もしパパがどうしても遠くへ行くというなら，おじいさんならきっと引き止めてくれると考える。

ある日，「パパの荷作りを手伝って」と母親がアスラムに言った。父親はアスラムに「おじいさんの所へ行く」と言った。よかった，パパが遠い所へ行ってしまうと思いこんでいたので父親のその言葉を聞きほっとした。

間もなく両親と一緒にアスラムはおじいさんの家へ行った。アスラムはおじいさんなら本当のことを言ってくれるかと思い，おじいさんに聞いた。すると，おじいさんは，「パパは本当に行ってしまうんだ，７つの海を越えて遠い遠い外国へ」と言った。おじいさんの顔は真剣だった。更に，「いいか，パパは白い妖精たちの国へ行き，そこから虹の七色のしあわせを，おまえや小さい弟やママのために持って帰ってくるのだ」と言った。

アスラムは父親が遠い所へ行く理由が分かった。そしてどうしても行かねばならないことも分かった。

父親はアスラムやアスラムたちが凧あげをしている様子やラーホールの町の様子の写真を撮った。だが７つの海を越えた所に，もし白い妖精たちがいなかったらどうになるのだろうとアスラムは思った。

空港に見送りに行く日が来た。

父親がいなくなり毎日の生活が変わった。学校へ行くのも，父親にオートバイで送ってもらえず，１人で行かねばならなかった。テレビでピストルをつきつけられ，ホールドアップをしている場面を見るとパパもあんな風になっているのではないかと心配した。

学校の英語の授業で先生がノルウェーのことを話してくれた。ノルウェーは白夜の国で，雪と氷の国，白熊のいる所であると知った。

父親から手紙が来るようになった。「パパはさびしいです，アスラムとも話が出来ず，アーイシャのだっこも出来ずさびしいです」と書いてあった。アスラムも「大好きなパパへ。おじさんがカメラを買いました。妹がはいはい出来るようになりました。写真が出来たら送ります。たのしみにしていて下さい」とアスラムも返事を書いた。

「１人で不便なことはないですか。この前試験で百点を取りました。妹に歯が生えてきました」とアスラムは父親の留守の間に妹が大きくなっていく様子も書いた。

「アスラム，学校の様子はどうですか。欲しいものがあったら言って下さい」とまた父親から手紙が来た。

赤い凧を買って凧あげをしている時だった。父親から手紙が来た。それは嬉しい便りだった。それはみんな父親の所に来るようにというものだった。

ノルウェーに行くんだ，パパと会えるのだとアスラムは喜んだ。学校でもみんなに「僕はノルウェーに行くんだ」と話した。

友だちのラシードは，前にノルウェーに行ったことがあり，また行くと言ってアスラムや友だちにノルウェーのことを話した。そしてノルウェーでは「ありがとう」を「おおきなお世話だ」と言うのだとみんなに教えた。

またおばさんも，テレビでサーフィンに乗るコーマーシャルを指さしながら，「ノルウェーの生活はあんな風だ」と言った。

アスラムたちはノルウェーに着いた。空港の係員に向って，早速「おおきなお世話だよ」との言葉を使って怒らせた。

空港には父親が待っていた。互いに再会を喜びあった。

雪景色を見ながらノルウェーでの新しい家に行く。

パパは僕たちのためにアパートを用意していてくれた。ピカピカのアパートだとアスラムは喜ぶ。

子供部屋もあった。アスラム１人の部屋もあった。それに机と椅子もそろっており，アスラムはまたパパと一緒にノルウェーの生活が始まると言って喜んだ。

「おじいちゃん，僕も７つの海を越えて来ました」と手紙に書いた。

父親は毎日朝早く仕事で家を出た。アスラムにとり雪は珍らしかった。

ラシードとラシードの母が挨拶に来た。はじめての外国で，パーキスターンで一緒に遊んだ友だちと会えてアスラムは安心した。翌日ラシードがまた来て，一緒に町に出て初めて見る地下鉄や駅のエスカレーターにも大いに驚いた。

学校へ行くと，ノルウェー語の勉強もあった。

「わたしたちはノルウェーにいます。ですからノルウェー語を話します。わたしの名前はトリグベと言います。あなたの名前は何と言いますか。わかっていないね。……そうそうよく出来ましたね」という風な授業で今までまったく知らなかった言葉もだんだんと覚えていく。

アスラムは５年Ａ組に入った。担任の先生から「今日からみなさんと机をならべるアスラム君です。アスラム君はパーキスターンから来ました」と紹介された。

休み時間には「君，本を読める。この本，貸してあげる」，「ノルウェー好きかい，雪ばっかりの所だけど」といろいろと質問を受けた。

学校に行き始め，まだ間もない日のことだった。

「今日，わたしのバースディー・パーティーがあるの。来てくれない」とオゼという名前の女の子にささやかれる。ノルウェーで友だちの家へ呼ばれて行くのは初めてのことで，母親は本人以上に緊張し，アスラムに一番いい服を着させ，パーキスターンから持って来た物をお土産として，アスラムに持たせた。

「アスラムが来たわよ。ジャンパーを脱いだ方がいいわ」と言ってアスラムの来るのを待っていた。

「すてきな包みありがとう」と言い，オゼはその包みを開け，出てきたガラスの小さな鏡がはめこんである布を，パーキスターンではクッションとして使うものであったが壁掛けと言った。

「パーキスターンにコーラある，アメリカの飲み物だけど」

「ケーキ食べない，パーキスターンにケーキあるの」

「ゼリー食べたことある？」

「テレビで見たけど，パーキスターンの洪水でたくさん人が死んだの」

「ホテルって知っているかい。でっかい建物だけぞ。パーキスターンでは車の代わり，象や駱駝を使っているの」

いろいろとみんながアスラムに聞いた。そしてその質問は段々とパーキスターンやパーキスターンの人々を蔑み馬鹿にしていくものとなった。

アスラムはそれらの質問に腹を立て，席を立って「僕，もう帰るよ」と言った。

戸口の所で帰ろうとするアスラムに「これうちのお兄ちゃんのジャンパーなの。あなたにぴったりだと思うわ。よかったらきて。とても高かったの」とオゼの母親が言った。アスラムはお礼を言って受け取ったが，オゼの母親にまで自分が蔑まされているかのように感じた。一端は受け取ったもののアスラムは雪の夜道を突然引き返し，オゼの家に戻り，それをくれたオゼの母親に突き返した。オゼの母親は「あなたに差しあげたのに」と驚いて言った。「僕は物乞いじゃあありません」とアスラムは言った。

友だちと学校の外での活動で募金活動をすることになった。２人１組で町に立つことになったが，自分の相手に，別々にした方が余計に募金を集めることが出来るのではないかと言われ，アスラムは１人で道行く人に募金をお願いし始めた。

いろいろな人がいた。「いい子だね，おつりは取っておきな」と言う人もいれば，募金の勧誘の言葉を無視していく人もあった。

アスラムは，しばらくして通行人の１人から「国から補助金をもらっているくせして。このノルウェーには物乞いのチビなど必要としない。さっさと自分の国へ帰るんだな」と言われた。

その言葉はオゼのバースディー・パーティーでみんなから受けた言葉以上に，アスラムの心を傷つけ，ショックを与えた。

家に戻り，父親に僕たちは町で募金活動をしていると話すと，父親は，「この国の人たちは自

分の身内を放り出し，他人のことばかり気を使っているが，そうでなく，他人はその後なのだ」と言った。そしてアスラムに強く，「おまえはノルウェー人にはなれないのだ」と言った。

父親のこの最後の言葉もアスラムにはショックだった。どうせおまえはノルウェー人になれないんだとの。

その後も学校で，アスラムの気持を逆なですることがいろいろと起きた。

その１つに写真クラブのメンバーが２人１組みになって写真を撮ることから起った出来事があった。アスラムの相手は、アンネスであった。見掛けは不良っぽく初めアスラムは好きになれない相手で，いやな感じがしていた。だが非常にいい友達で，「ありがとう」を「おおきなお世話だよ」という言い方は，間違った言い方で，写真を撮り始めてからアンネスから教わったことであった。

アスラムはこのアンネスとペアを組んで，それに女子のメデテをモデルにして３人で，スキーのジャンプのまねをする写真を取った。アスラムはアンネスの言うとおりにして，ジャンプの選手の格好をした。写真の出来ぐあいはよく，メデテとアスラムの雪の中を飛ぶ様子は２人とも本当のジャンプの選手のような格好であった。

翌日学校で何人かの友だちが写真を見せてくれないと寄ってきた。

「なにこれ，みんないい顔に写っているじゃあない」，との言葉の舌が乾く間もなく，「だけどこれノルウェーの顔じゃない，黒いじゃあないか」と言って，友だちはアスラムに写真を投げつけて立ち去ってしまった。

またエデテの母親は自分の娘がアスラムと一緒に写真に写ったことをよく思っていなかった。アスラムとアンネスがエデテの家に行き３人で話していると，母親が出て来て，陰でエデテに何か言い，アスラムとアンネスは早々，エデテの家を出なければならなかった。

学校にはそれぞれのクラブの部室があった。写真クラブの部室の隣の部屋には卓球台があった。ある日，エデテとアスラムはそこで卓球をしていると，２人の男子生徒が入ってきて，「エデテ，おまえ写真のモデルになったのか」と卓球をしている２人に話しかけ，突然，「俺にも卓球をさせろ」と言いながら，アスラムに襲い掛ってきた。

アスラムの気持はとうとう切れた。映画の画面ではアスラムの前のガラスが壊れ落ち，アスラムが走り出す場面となってそれが表現されている。

「生まれた所に帰るんだな」と，募金活動の時，街頭で老人にののしられた言葉がアスラムの心に去来した。

翌日，学校を休んだ。寝ながらパーキスターンのおじいさんの夢を見ていた。寝言でおじいさんにパーキスターンに帰りたいと訴えていた。

その声に気づいた父親に，「ここはパーキスターンでなく，ノルウェーなんだ」と言われながら起こされた。

そこにアスラムが忘れたジャンパーをアンネスが持ってきて，「君にたのみたいことがある。

今ノルウェーに来てという作文を書いてもらっているが，君も書いてくれないか」と頼まれた。
「いやなら，いいんだけど」と言われて。
「アンネス，きみはいい奴だ，本当におおきなお世話だよ。君にあったことをみんな話す，何があったか，どうして僕がノルウェーに来ることになったかも」
映画はここで終わる。

2）映画から見える移民の問題点

この映画は移民少年が，移民先で成長していく様子を物語っているが，この映画の中に移民より起こってくるさまざまの問題が見える。それらは以下のような問題である。

1）移住の必要性
2）家族の問題
3）就職の問題
4）気候の違いの問題
5）言葉の問題
6）文化の違いの問題
7）社会制度の違いの問題
8）異国で同郷の人々との係わりの問題
9）偏見，差別，いじめの問題
10）移住以前の所への郷愁の問題

第二章　イン・パ分離独立の難民と小説

1）分離独立と難民を扱う動乱文学

1947年インドはヒンドゥー教徒の国インドとイスラーム教徒の国パーキスターンの２つの国に分かれて，イギリスから独立した。

この分離独立は多数の難民を生みだした。独立直後，インドからパーキスターンへ，パーキスターンからインドへと１，２年のうちに1500万人とも言える人々の移動があり，その過程で100万人もの人命が失なわれたという。移動の途中，１人あるいはそれ以上の人を失なわなかった家族は殆どなかったという。

このような訳でこれにテーマを取り多くの作家や詩人が小説や詩を書いた。このような文学を現在動乱文学としてまとめて考えられている，ややもすればその事件の激しさのあまり，単に移動中に起った暴動を扱ったものは文学性を持たないものも少なくはなかった。しかしそれらを冷静に受け止め，クリシャン・チャンダル（1912年生）やイスマットチュグターイー（1918年生），ベーディー（1915年生），マントー（1912年生）のような作家達は優れた作品を残している。

2）インティザール・フサインと長編小説『目の前は海』（アーゲ・サマンダル・ハイ）

インティザール・フサインは1925年インドのアリーガルに生まれ，1947年分離独立で避難民としてパーキスターンに入ってきた。分離独立はカレッジの生活を突然終わらせ，他のイスラーム教徒と同じようにパーキスターンに移住しなければならなかった。

移住直後，短編「カイユームの店」「先生」などの作品を書いた。それは短編集『路地』に収録され賞讃を受けた。それ以来，文学活動は旺盛で，現在もラーホールに住み，現在では英字紙「ドーン」などに文学や文化などに関するコラム欄を担当し執筆している。1980年，最初の長編『居住地』を書き好評を博し，1995年再び長編『目の前は海』を著した。

これらの短編，長編はほとんど分離独立に関してのもので，登場人物，背景，提起されている問い，そしてその答えは分離独立の体験から出ている。しかしインティザール・フサインは，クリシャン・チャンドル，イスマット・チュグターイ，マントーなどの作家より，一世代あとを代表する作家で，前者の作家たちが，分離独立時の混乱の直接的なことを書いているのと違って，難民として入って来た人々の様子がどのように変化したか，どのような状況に迫られたかを書いている。即ち第一節で述べた「七つの海を越えて」の中で生じているような問題に関心を示している。

3）長編小説『目の前は海』（アーゲ・サマンダル・ハイ）と難民

インティザール・フサインが長編小説『目の前は海』を著したのは1995年，分離独立でイスラーム教徒の国パーキスターンが成立してからおよそ50年がたってからである。

その間さまざまな出来事が起こり，インドから入って来た者として，パーキスターンの中でその変化を体験しなければならなかった。すなわちパーキスターン建国後の新生国家の中で，民主主義の抑制や文民体制の廃止が起こり，そして軍事政権の開始となり，これは1958年のアユーブ軍事政権をもって完成するが，それらをまず体験しなければならなかった。そして1965年第２次イン・パ戦争でインドとの衝突，東パーキスターンがバングラデシュとして独立する第３次イン・パ戦が起こる。その後カラーチーで1973年言語紛争が起こり，70年代後半よりくすぶっていたインドからの避難民に対する扱いをめぐり，1980年代の後半から明瞭な形で出てくるＭ・Ｑ・Ｍの問題，すなわち避難民民族運動がカラーチーを中心にして起こり，それらの問題をラーホールの方から見ていた。

この小説は上に述べたすべてを含み避難民がパーキスターンへ移住して来て，その移住後生じたすべての問題を浮き上らせている。すなわち分離独立の1947年より，この小説の発行の1995年までのパーキスターンの情況と出来事を背景にして，避難民としてパーキスターンに入って来た人々の様子を述べている。更にそれだけでなくこの小説の中にはイベリア半島にイスラーム王朝があった時のこと，そしてその領域であったアンダルスからイスラーム教徒が撤退するような

話も出て来て，この小説の中で移住の普遍的な問題が述べられている。

物語の主人公及び中心人物は２人である。１人の主人公の名前はジャワードである。彼は何か話の語り手のように自分の話を語る。もう１人の主人公はマジュー・バーイーである。第３の主人公は，全体の話の中で中心人物ジャワードの記憶の中に住む女性である。彼女の名前はミーフーナで，ミーフーナはジャワードのおばさんであるが，分離独立の後，彼女はインドに残った。一方ジャワードはパーキスターンのカラーチーに来る。この他にミルザー・サーハブ，アーガー・フサイニー，ガーズィー・アタウッラー，そして数人の女性も登場し，これらの人物はみな社会生活の中でのさまざまの階層を代表している。

この物語は移住により生じた社会的，経済的問題と共に心理的な問題も扱っている。登場人物は過去の出来事に強くとらわれ，生まれ育った所の路地や小道，そこにあった木々や戸や壁，遊び友達を生涯忘れることが出来ない。異境にあり生活の安定が得られないと，なお一層それらの物が忘れられなくなり，それらから逃れることが出来ない。そしてその子供時代の記憶の中に戻り，その中に浸り，たとえ幾らか世の富を得ようと，不足感が残り，年を経ても人格の完成がなく描かれている。

1947年パーキスターンに移住して来た者は新生国家パーキスターンに夢と希望を託していた。しかし新生国家パーキスターンに着くと，ここで多くの予期しなかったさまざまな問題に直面しなければならなかった。彼らは多くの困難を耐え忍び，多くの危険に直面しながらインドからパーキスターンに着いた。だが現実は移住者の期待を裏切るものばかりであった。それ故，ジャワードはカラーチーに着くと失望と恐怖のあまり，われわれはインドからここに移住して来たが，いま前途に何が見えるかと，マジュー・バーイーに聞く。マジュー・バーイーは返答に窮し，それは海だとしか答えられなかった。つまり今われわれの前にどんな道も見えず，もしカラーチーから見れば前に行き場のない海が見えるだけだということであった。

この『目の前は海』の中の避難民たちがカラーチーにつき，まず最初に直面した問題は住む場所であった。キャンプはあったがほんの少しの人達しか入れなかった。そしてそこに入れない人々は路上や空地に住まねばならなかった。

住居の問題が一段落つくと，生計を得るために仕事を探さねばならなかった。当時パーキスターンには学歴のある人は，インドの方に行ってしまい少なかったので，インドから来た人々は比較的容易に，良い悪いは別にすれば仕事につくことが出来た。

その後の問題は結婚であった。同郷の人と結婚が出来るかどうかの問題が起こった。すなわちラクナウから来た人が他郷のビハール出身の人と結婚をしなければならないような社会的問題も移住者間で起こった。その後1965年，1971年の第２次，第３次のイン・パ戦争は，インドとパーキスターンの間の往来を更に難しくした。

やがて1973年，カラーチーで言語間の争いも起きた。ウルドゥー語を話す人，スィンディー

語を話す人，パンジャービィー語を話す人，パシュトゥー語を話す人といろいろの母語を持つ人がカラーチーにおり，カラーチーは１つの言葉だけが使用される所ではなかった。さまざまの母語を持つ人々の寄り集まった所で，カラーチーを含むスィンド州で州語を何にするかで大混乱が生じた。また同じイスラーム教徒でもスンニー派の人もいればシーア派の人も一緒で宗教間の問題もあった。すなわちこのような社会的問題，宗教間の争い，言語問題とさまざまの問題があり，その中でも一番の問題は言語問題であった。

カラーチーでは西北辺境州出身のパターン人がパンジャーブ州出身のパンジャービィーと争い，スィンディー語を話す人がウルドゥー語を話す人と争い，もはや人を尊敬するとか，人々の命を大切にするとかのことがなくなり，好きなだけ他の人の命を奪ってもなんでもないような状況も起きた。しかしインドから来たイスラーム教徒の人々は，自分の土地を捨て，家を捨て，土地や親戚を捨てて来た。それはヒンドゥー教徒が多数いる所から離れ，自分たちの理想とする所へ行き，イスラーム教徒の中で自分たちの平和と生命を守ろうとする意図からであった。

しかしここカラーチーに来てみると理想と現実は違った。公務員などの採用試験に際し，スィンド州のはいつきの人より高い点数を取りながら不採用になることも起き出した。また自分たちの母語とは違うスィンディー語の習得にも迫られた。またインドに残して来た家族とは離れ離れになってしまい従来の家族関係も壊れてしまった。

この小説の中には避難民の心理的な問題もある。主人公ジャワードは追憶の中で生きており，常に過去を思い出している。ジャワードはビヤーズプル出身で年齢も既に40を越しており，何か状態が悪くなると，自分の出身地を思いだすノスタルジアに浸る。そしてそれがジャワードの人格をも壊してしまうことになる。前途のことを考えるのでなく，いつも過ぎ去ってしまったことに思いを馳せている。

第３の問題もある。ジャワード，マジュー・バーイなど，彼らがインドを去る時，親族や肉親から自分の国を捨てるな，自分の国を捨てて他の地へ行くな，土地が呪うぞと何度も言われた。にもかかわらず親を捨てて，親戚を捨てて新生国家パーキスターンにやってきた。しかし今，ジャワードもマジュー・バーイーも彼らがしたように，自分の子供たちから同じ仕打ちを受ける破目になった。すなわち，子供たちは生まれた国，パーキスターンを嫌い，イギリスやアメリカ，カナダなどの方に行ってしまった。２人とも今，親になってみると，自分たちが親にしたことと同じことが子供たちによってされている。

ここに主人公のジャワードは今２つの苦しみを持つことになった。親から離れてしまい現在ではインドに戻れず会えない苦しみと，自分の子供達が遠く離れて行ってしまった苦しみである。

この小説の中では分離独立によって生まれた社会的問題，経済的問題，文化的問題の他にこのような心理的問題も扱われている。

第三章　難民二世に対する面接調査

1）面接調査

移民を扱った第一章の「七つの海を越えて」と第二章で述べた難民を扱った小説『目の前は海』を較べてみると，難民がある地に定住し，年数が経過していくと，移民として新天地に渡り生活する時，生じる同じような問題が生じてくるように見える。

今回の調査はインドからパーキスターンに難民として入ってきたイスラーム教徒を第一世代をすれば，パーキスターンで生まれた子供たちがどういう行動をするかに焦点を当てた。それ故その質問項目は第一章で出てきた問題を加味しながら作りそれに沿って面接調査をした。

2007年３月にイギリスで，８月にカナダで移住者の自宅に行き，面接調査を行なった。

面接をする相手は，その両親がインドで生まれ，1947年のインド・パーキスターンの分離独立で避難民としてパーキスターンに来て，その後イギリスやカナダに移住した者である。

イギリスでの被調査者の選定はカラチ大学名誉教授ムイッヌディーン・アキール教授，カナダでの被調査者の選定はトロント在住アシュファーク・アハマド氏による。

イギリスではロンドンで２名，マンチェスターで２名（１名はインドから直接イギリスに移住した者であった），バーミンガムで２名（１名は被調査者が席を何度か立った時，テープレコーダーを押し忘れ半分しかレコーディングが出来なかった）であった。

カナダではトロントで10名（うち１名は被調査者の息子であった），エドモンドで２名で，イギリスの時もカナダの時もその被調査者の家に行って行なった。被調査者の住んでいる家はいずれの被調査者も日本でのニュータウンにある一戸建ての家より大きく，敷地は広かった。

面接内容はおよそ次の通りである。１．現在のイギリスやカナダの生活。２．パーキスターンでの生活。３．インドでの移住者の両親の生活。

１．イギリスやカナダでの生活

1）あなたの名前は何ですか，何歳ですか。

2）どこに住んでいますか。

3）家族は何人ですか。

4）イギリス，カナダに来て何年ですか。

5）今，何をしていますか。

6）なぜイギリス，カナダに来たのですか。

7）その時，知り合いはいましたか。

8）仕事はすぐ見つかりましたか。

9）ここでの生活に不便はありますか。

10）家では何語を使っておりますか。

11）子供たちはウルドゥー語が話せますか。

12) パーキスターン人と会いますか。その時どんな言葉で話しますか。

13) 夢を見る時，何語で話していますか。

14) 詩会(ムシャーイラ)に参加しますか。他にパーキスターンの人が集まる時がありますか。

15) このままイギリス，カナダで生活を続けていきますか。

16) パーキスターンをよくするには何が必要ですか。

2．パーキスターンでの生活

1）パーキスターンではどこに住んでいましたか。

2）教育はどこまで受けましたか。

3）パーキスターンを出る前，何をしていましたか。

4）その時，家族は何人でしたか。

5）どうしてイギリス，カナダに来ることを望んだのですか。

6）国を出る時，不安はなかったですか。

7）インドから来た時，どこに住みましたか。

3．インドでの生活

1）インドのどこに住んでいましたか。

2）パーキスターンにいつ来ましたか。

3）両親からインド・パーキスターンの分離独立に際して起きた混乱やパーキスターンまで到着する間の出来事などを聞きましたか。

以上の質問に対し，被調査者からの回答を検討すると以下のようになる

1）年齢，滞在年など基本的なことを表にすると以下のようになる。この表には，インドから直接イギリス，カナダに行った者，及びトロントでの被調査者の息子についての面接の結果は除いた。

イギリスの被調査者

居住地	性	年齢	移住時年齢	移住年	滞在年	最終学歴	移住地での職業
ロンドン	男	61	25	1966	31	修士	銀行員
ロンドン	男	66	26	1967	40	修士	図書館員
マンチェスター	男	48	31	1990	17	博士	教員
バーミンガム	男	70	27	1964	43	学卒	銀行員

カナダの被調査者

居住地	性	年齢	移住時年齢	移住年	滞在年	最終学歴	移住地での職業
トロント	女	65	48	1990	17	学卒	詩人
トロント	男	60	45	1992	15	学卒	旅行業

居　住　地	性	年齢	移住時年　齢	移住年	滞在年	最終学歴	移住地での職　　業
トロント	男	50	40	1997	10	学卒	旅行業
トロント	女	65	28	1970	37	修士	主婦
トロント	男	60	58	2005	2	修士	編集
トロント	男	62	35	1980	27	修士	テレビ局員
トロント	男	65	30	1972	35	修士	航空会社員
エドモント	女	65	48	1990	17	修士	インテリア
エドモント	男	60	24	1971	36	学卒	マシニスト

上の表でイギリスでの被調査者の滞在年とカナダでのそれと較べてみると，イギリスのサンプル数は数は少ないが，それにもかかわらず，滞在年の多い人が比較的多数いるように見える。

この表の数には含めなかったが，マンチェスターの駅で，バーミンガム行きの列車を待っている時，駅のベンチに南アジア出身らしい人がいるので聞いてみると，その人はパーキスターンから来た人で，学歴はマトリック終了，マンチェスターの織物工場で働くために，1960年に来たという。今は娘のところにいるとのことであったが，受け答えがはっきりしない所もあったので，どうしてそんなに前から来れたか聞いてみた。すると1960年代はイギリスで労働力が不足しており，自分たちが当地に来ることはイギリスにとりプラスになることで，多いに歓迎されたとのことであった。

即ちカナダより先に移民を受け入れる態勢がイギリスにあったと言える。

またイギリスには人種差別がないと被調査者の１人が言っていたが，移民を受け入れて数十年の時の経過がそうにしたとも言えよう。この点カナダの方は滞在年が少ないが，政府の積極的で手厚い移民受け入れで，イギリスと同じように移民で来た人に対する差別はないように見える。

2）なぜイギリスやカナダに来たか。

多くの人が仕事を求めてと回答している。カナダへは自分の子供の教育のためと答えた人もいた。イギリスへは自分の留学のために来て，留学終了後，職が得られそのまま居ついてしまったと回答した人がいた。自分は来たくはなかったが旦那の仕事の都合で来たと言った女性もいた。さらに1980年代に来た者はハク大統領のイスラーム原理主義が嫌で来たと回答した者もいた。

3）不便はあるかの質問。

カナダに来た当初，周囲にイスラーム教徒がいず，イスラーム教徒が食べられる食材が手に入らず遠方まで買い出しにいかねばならなかった。時々，近隣のイスラーム教徒と一緒になって，１頭の羊や牛をイスラーム教徒の仕方で解体し，その肉を分け合ったという。最近はイスラーム教徒も多く，近くにイスラーム教徒が食べられる食材を扱う店があり，その心

配はないという。カナダに70年代に入って来た人達の共通の回答であった。

イギリスもカナダも人件費が高く，パーキスターンにいる時はしなかった掃除，洗濯，炊事を自分たちでしなければならなくなった。

4）イギリスやカナダに知り合いはいましたか。仕事にすぐ就けましたか。

この表の中で１名だけが知り合いも，親戚もいなかったと回答したが，他は何らかの関係があり，その所へ来て，職を得られるまでの間，援助を受けている。

今回の調査では面接調査はしなかったが，イギリスでもカナダでもタクシーの運転手はインドやパーキスターン出身の人が多い。イギリスで乗った時，タクシーの運転手はパーキスターン人やインド人が多かったが職種によって得やすい職業，得にくい職業があるように見える。

5）家では何語を使っているか。

ほとんどの家庭で，ウルドゥー語を使おうとしている。外に出れば英語を使わなければならないのでと言う。英語とウルドゥー語の両方をチャンポンでと答えたのはカナダで２件であった。

マンチェスターでは５年前にウルドゥー語での授業をする学校が出来たという。カナダでは現在，ウルドゥー語に限らず，１学年で英語以外の少数言語の生徒が15名いたら，その言語の教員も置かなければならないと言う。

イギリスのマンチェスターやカナダのトロントにはウルドゥー語でのテレビ番組のチャンネルがあり，そこでは24時間，ウルドゥー語で放送しているという回答があった。

6）同郷の人と会う時は何語ですか。

すべての回答者がウルドゥー語でと答えた。

7）夢は何語で見ますか。

すべての人が即座にウルドゥー語でと答えた。その夢の背景はパーキスターンである。誰もが自分の育った場所を忘れることが出来ず，カナダ在住35年の人が，パーキスターンのカラーチーの当時の道に沿ってあった建物を，その次は何，その次は何とすらすら挙げた。

8）詩会（ムシャーイラ）に参加しますか。

参加しないと回答した人は誰もいなかった。詩を自分で書かない人も，そこは情報交換の場になるのでと言った。

勿論子供たちも行くが，イギリスやカナダで生まれた子供たちには少しウルドゥー語の詩は難し過ぎるので，大人と較べて参加数は少ないとの回答があった。

ある家でインタビューが終わり，夕食をご馳走になっている時，その家のカナダ生まれの息子はウルドゥー語の大詩人ガーリブの名前を知らず，父親はガーリブをシェイクスピアのような詩人だと説明していた。

その他，詩会以外にも結婚式，あるいはイスラームの宗教行事には多数の同郷の人が集

まっていた。今回トロントの滞在は６日間であったが，２回パーキスターン人の結婚式に招待され，結婚式場内はまるでパーキスターンそのものであった。

9）このままイギリスで，カナダで生活を続けていきますか。

イギリスにいる人も，カナダにいる人も，回答者全員このままの生活を続けていくと答えている。

その理由として教育制度の良さ，医療制度を含めた福祉制度の充実，生活の利便性をあげている。またたとえ帰りたい気持があってもここで子供が生まれ，20年30年と生活してくるとここが第２の故郷となってしまったと言う。

カナダ在住37年の人は，心臓を患う大病をしたが，その医療費一切，本人が払う必要がなく，カナダ政府の負担であったと言う。今も心臓にペースメーカーを入れ，その治療費は無料だと言って，シャツを脱ぎ，その様子を見せてくれた。階段を昇るのに心臓に負担になるからといって，２階に上る階段の脇に椅子が自動的に上に昇る施設も無料でつけてもらえたと見せてくれた。そして月々年金が1200ドルも得ていると言った。

今回インタビューに応じてくれた人達は比較的，経済的に豊かな人たちであった。そこで１年に１度か，２年に１度，必ずパーキスターンに行き，親類の者，友人にも会っていると言う。

移住してきた人々は完全に故郷を忘れることは出来ない。それ故このように，１年か２年に１度パーキスターンに帰ると共に，その文化を忘れ去ることは出来ず，移住先で生まれた子供たちにも，故郷の文化を伝えようとしている。

トロントではウルドゥー語の雑誌も出ているが，それがあまりに宗教的な色彩が強いものであるので，もっと文化に重点をおいたものもあるべきとの理由で，新しい雑誌を準備していると，そのゲラを見せてくれる人もいた。

10）パーキスターンでどこまで教育を受けて来たか。

イギリスやカナダに移住してきた今回の回答者の教育水準は高く，カレッジ止まりのいわゆる学卒者が３名であとはすべて修士を終えている。これら回答者の父兄の教育もインドで高水準のものであった。

11）インドのどこからパーキスターンに来たか。

回答者の両親は，デリー，ムンバイ，アリーガル，ラクナウ，ハイデラーバード・ダッカン，パトナ，アラハーバード，ワラーナスィーなどの地から来たと言う。ヒンドゥー教の聖地であるワラーナスィーを除けばこれらの都市にはイスラーム教徒が多く，優れたウルドゥー語を話す地域である。これらの地域から来た者は自分の言葉に自信を持っている。

12）インドからパーキスターンのどこに入って来たか。

回答者の両親の多くがカラーチーに入ってきている。しかしカラーチー在住の者より教育程度が高かったので，移住後，すなわち分離独立の1947年以降のカラーチーの役所や学

校で職についている。そして子供には高い教育を与えている。やがてカラーチー在住の者がインドからの避難民に職を奪われる結果，カラーチー在住の者たちから巻き返し運動が起こり，公務員などの採用試験でカラーチー在住の者はインドから来た人々より低い点数で合格する傾向が生じる。その結果，避難民として入って来た人の子弟が高い教育を受けているにかかわらず，1970年代の後半ぐらいより，公務員などの職につけなくなる。またカラーチーはスィンド州の州都でもあるが，ウルドゥー語の習得も課す事態が1970年代の初期からおこる。

このような事態の結果，M・Q・Mの運動，すなわちムハージル・コーミー・ムーブメント（避難民民族運動）が起って来る。

13）避難民としてパーキスターンに入って来る時の困難や恐怖について聞いたことはありますか。

インドからパーキスターンに移ってくる難民の発生したのは1947年のインドがイギリスからインドとパーキスターンの２国に分かれて独立した時のことである。

インド側にいたイスラーム教徒は新生国家パーキスターンへ，またパーキスターン側にいたヒンドゥー教徒やスィク教徒はインド側に移った。１，２年の間で総勢約1500万の人の移動があった。そしてその間，100万弱の人が生命を落している。

いずれにしても避難民は生命をかけて着のみ着のままで移動している。

今回の回答者は当時生まれていないか，生まれていたとしても，３，４歳であり，その時の様子は全く知らないか，わずかに記憶に残っているだけである。

この質問に対し，恐ろしかったということ以上に，両親から聞いていないという回答が多かった。この質問に，今の日本の若い人達は広島のことを知っていますかと逆に質問した回答者もいた。

そのような逆質問をされると，のどもと過ぎれば熱さを忘れるの言葉を思い出さずにはいられなかった。この点当時の状況を記した文学作品が非常に役に立つ。

２）難民一世の最後の苦痛

インド・パーキスターン分離独立が起きたのは1947年，今からちょうど60年前である。それぞれ新しい国を求め人々の大移動があった。

これらの人々が20歳で1947年に，新生国家パーキスターンに移って来たとすれば今は80歳になっている。誰でも子供時代に過した地は忘れ難く，子供時代を過した地に行ってみたいと願う。しかし現在インドとパーキスターン間の政治関係によりビザ等の制約がありすぐ行くことは出来ない。人は行けないとなると益々，郷愁の虜になる。

また，これらの人々に30歳で子供が生まれたとすればその子供の年齢は現在50歳である。その子供がもし，イギリスやカナダに行っているとすれば，この面接で分かったように，パーキスターンに帰ることを望まないケースが多い。そこで子供にも会いたいと思ってもすぐ会えるわけ

ではない。即ち目の前にも海，目の後ろにも海がある。

参考文献

片岡弘次「インティザール・フサインと動乱文学」（片岡弘次『少数民族の生活と文化』未來社，1998年，240-276頁。）

（平成18年度基盤研究：海外学術調査による）